

つなぐ

TSUNAGU 2013

福島とともに生きる

Living with Fukushima

与福島共生

目 次

四旬節愛の献金趣意書	2
2012年四旬節キャンペーン報告	3
はじめに ともに福島の希望を模索しながら カリタスジャパン責任司教 菊地 功.....	4
第1話 被災した教会 交わりの場に生まれ変わって	5
第2話 私たちの選択 誰の言葉にも左右されず私たち夫婦の決断を生きる	9
第3話 それでも福島で生きたい 短大生の福島で暮らすことへの思い	13
第4話 野菜販売で復興支援 風評被害を受けた農家に元気を取りもどすために	17
第5話 聴くことは最善・最良の奉仕 人の存在を支え、魂の痛みを気遣う	20
第6話 コミュニティを守る 一日一日を元気に健康に生きる、浪江に帰るために	23
おわりに 福島に寄り添い続ける カリタスジャパン担当司教 幸田和生.....	27
お知らせ 社会系各委員会発行冊子のご案内	28
2013年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	30

●英語・中国語訳のご案内●

第3話「それでも福島で生きたい」の英語・中国語訳をカリタスジャパンのホームページに掲載しました。以下の URL からダウンロードできます。英語・中国語圏のお知り合いの方にご案内下さい。

The English translation of this year's 3rd article, "Even so, we want to live in Fukushima" can be downloaded from our website.

http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2013_en.pdf

第三篇《尽管如此我们还想在福岛生活》的中，英译文已经上载于日本明爱网站，可以从下面的连结下载：

http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2013_cn.pdf

四旬節 愛の献金

第二バチカン公会議開催 50 周年にあたる昨年 10 月 11 日から、私たちは「信仰年」を過ごしています。この一年間、私たちは信仰という賜物を受け継いだものとして、信仰の原点をあらためて見直すことによって、「主のもとにとどまり、主とともに生きようとする決断」（『信仰の門』10）を新たにし、自らの言葉と行いでそれをあかすように招かれています。

教皇ベネディクト 16 世は、信仰年開催の告示である自発教令『信仰の門』に次のように記して、私たちが新たな熱意を持って、あかしの業に取り組むよう招いておられます。

「わたしたちは塩に塩気がなくなり、光が隠れたままでいるのを受け入れることができません（マタイ 5・13～16 参照）」

信仰年にあたり私たちの信仰の原点を見つめ直す時、キリストへの信仰に生きるものにとって、愛の業は欠かすことができないという事実にあらためて気がつかされます。

教会の伝統は、四旬節に「祈り」と「節制」と「愛の業」という三点をもって、信仰を見つめ直すように求めています。加えて信仰年にあたり、私たちは信じていることを自らの言葉と行いであかすように招かれています。

カリタスジャパンが担当する四旬節献金は、緊急災害援助にとどまらず、国内外において危険にさらされている多くの「いのち」を守るために役立てられ、さらには少数民族の子どもたちの教育支援や女性の自立支援などの長い時間をかけて実施される支援にもあてられます。神から与えられた賜物である「いのち」が、ふさわしい尊厳を与えられるために、努力を続けております。このカリタスジャパンが行う支援は、皆様の募金に支えられています。とくにその約 3 分の 1 は、四旬節献金によって支えられています。

今年の四旬節にも、あなたのわかちあう愛の心が世界の多くの人に届きますように、四旬節献金にご協力下さい。

2013 年 2 月 13 日 灰の水曜日

カリタスジャパン責任司教 菊地 功
担当司教 幸田和生

2012年四旬節キャンペーン報告(2011年9月～2012年8月)

四旬節献金総額 60,605,977 円

主な援助先		(円)
インド	年間一括援助	5,645,500
ウガンダ	持続的農業プログラム	3,512,446
パキスタン	アフガン難民教育支援	3,150,598
ネパール	子どものための平和教育センター支援	1,070,106
ヨルダン	イラク難民と社会的に脆弱なヨルダン人支援	1,674,600
ヨルダン	女性移住労働者のためのコミュニティセンター支援	837,300
スリランカ	女性移住労働者権利啓発支援	1,539,200
バングラデシュ	少数民族教育支援	8,266,518
カンボジア	地域医療支援	2,490,900
カンボジア	若者職業訓練支援	2,490,900
フィリピン	台風ネサット・ナルガエ緊急支援	1,085,600
タイ	洪水災害緊急支援	3,095,700
トルコ	東部地震緊急支援	1,031,900
グアテマラ	熱帯低気圧 E12 災害緊急支援	761,900
チャド	スーダン難民および受け入れコミュニティ住民支援	996,000
コートジボワール	選挙後暴動避難民緊急支援	1,098,800
西アフリカ・サヘル諸国	食糧危機緊急支援 (マリ/ブルキナファソ/ニジェール/セネガル/チャド)	3,613,150
レバノン	シリア危機難民緊急支援	536,600
コンゴ民主共和国	東部紛争避難民緊急支援	790,300
南スーダン	帰還民・避難民への基礎サービス支援	390,850

ともに福島希望を模索しながら

カリタスジャパン責任司教 菊地 功

東日本大震災の発生からまもなく2年が経過しようとしています。被災地に生きる人たちとの深い絆を見だし、地道に支援活動を続けている方は少なくありません。カトリック教会も、仙台教区の復興ビジョンに導かれながら、カリタスジャパンをはじめ全国の教会の総力を結集して、支援活動を継続してきました。被災地の教会や活動拠点を通じて、世界中の兄弟姉妹の愛の心を、目に見える絆として、つなげていく決意です。

さて、そのような中であって、福島県への支援活動には難しさがありました。それは、原子力発電所の事故という、これまでの日本社会では絶対に起こりえないと想定されていた出来事が、起こってしまったためです。起こりえないとされていたのですから、それに対する備えどころか、そもそも心構えがありません。大震災は未曾有の災害でしたが、しかし日本が初めて経験する災害ではありません。ところが原子力発電所の事故は、まさしく「想定外」であって、それに対する心理的、また物理的な備えは皆無だったと言っても過言ではないでしょう。

被災地での心理的負担は大きくなっています。これから先、生活再建への見通しは一体どうなのか。誰も明確な回答を持ち合わせていないのです。

決して被災地を忘れないという決意のもと、カリタスジャパンでは今年の四旬節小冊子を、福島での体験に焦点を当てて編集いたしました。これまで私たちが体験したことのない災害の地で、生活の再建のために取り組む多くの方々と一緒に希望を模索しながら歩んでまいりましょう。

被災した教会

交わりの場に生まれ変わって

被災・原発爆発・避難

Aさんが通うカトリック原町教会は、福島県南相馬市にあります。福島第一原発（東京電力福島第一原子力発電所）から、24.5km、海から5.5kmです。2011年3月11日（金）午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が、太平洋沿岸及び東日本を襲いました。翌12日、福島第一原発1号機が水素爆発し、30km、20km、10kmの距離にある住民に避難指示がでました。14日に3号機が爆発し、その音は、Aさんの耳にも「パン！」と南から聞こえました。15日には、2号機でも爆発、4号機で火災。すぐに「30km圏内は屋内待避」と防災無線が告げました。Aさんは、マスクで防備し、長袖を着て、頭には帽子をかぶって窓をピチッと閉めて防護しました。

南相馬市長は、避難を呼びかけ、バスを準備していましたが、Aさんの家では避難の話がまとまらず、どこに避難するか、手はずが整わずにうろうろしていました。

教会の被災

教会の建物は地震で被害を受けました。献堂60周年のお祝いをしたばかりで、壁や床や屋根などを細々ながらきれいに修繕して、いつくしんできた古い教会です。しかし、余震が発生するたびに壁の亀裂がひどくなっていきました。屋根にはブルーシートをかけて養生しました。

この教会には司祭は常駐しておらず、毎週、北仙台教会から通って来ていたのですが、震災で常磐線が不通になり、国道6号線はがれきで



教会内部の被害の状況

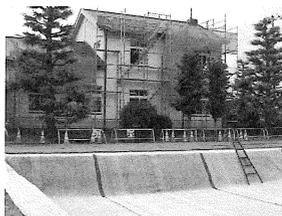
通行止めになり、司祭は教会に来ることができません。Aさんは、今後について、誰にどのように相談すべきか、まったく分かりませんでした。室内のがれきを片付け、ひびの入った聖堂で祈りました。情報も届かず、仙台教区やドミニコ会の動きも分からず、途方にくれるばかりでした。

4月8日の復活祭に、Aさんは北仙台教会でミサに与ることになりました。1時間半かけて出向く途中の6号線沿いの景色は、ひどいもので、言葉を失うほどの驚きでした。宮城県に入ってから、太平洋沿いの被害はとても口では言い表せないほどでした。

原町教会はドミニコ会が司牧を担当していました。とにかく、主任司祭のラトゥール神父を迎えて、4月10日、17日にはミサが行われました。参加者は5、6人でした。今後の話をしましたが、屋内待避のため信徒が集まることは困難で、建物も地震の被害で危険でした。30km圏外の信徒宅でミサをしましたが、教会で主日のミサができないので、日曜日は有志が自己責任で、集まれる人だけ集まって一緒に祈るという状態が続いていました。

教会の再興

原町教会の行く末がはっきりしないので、信徒は途方にくれるばかりでした。南相馬市の復興は、原発の放射能漏れの事故がすべての作業を遅らせていました。市の計画によって除染が始まり、汚染土は、駐車場が置き場になって埋

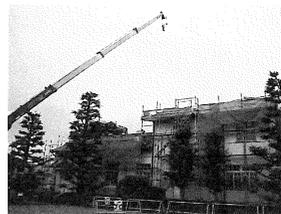


放射能で汚染された土を埋めるための穴

められ、樹齢30～40年のヒマラヤ杉も伐採されました。幼稚園が併設されているので、放射性セシウムが付着している危険なものは真っ先に排除されなければならないのです。

4月27日に東北新幹線が開通すると、ドミニコ会日本管区長が訪れ、教会の今後について4人の信徒を交えて話し合いました。「ここを閉鎖するわけにはいかない」「教会がなくなったら、信徒はどこへ行けばいいのか」「みんな路頭に迷ってしまう」など、切実な思いが吐露されました。

4月22日に、政府は屋内待避を緊急時避難準備区域に指定し直しました。指定が変わっても、このままでは財源もなく、工事もできません。しかし、幸いにも日本国内外からの支援金が仙台教区に集まり、その資金で建物を修理することになりました。工事関係者が少ない中、教区では最初に修理が行われました。



教会の屋根の工事の様子

6月1日に平賀徹夫司教は「被災地の教会には、日本人の司祭を常駐させる」と発表し、仙台教区から梅津明生神父が、がれきの中の原町教会に赴任して常駐することになりました。それは、Aさんたちにとってとても安心できる幸せなことでした。

6月11日には、東京教区の幸田和生司教他4名のCTVC（カトリック東京ボランティアセンター）の事務局の方々が訪れました。「何が必要ですか」との問いに、何かを支援していただくという考えに至らなかったAさんたちは、「教会の信者数がとても減ってしまいました。できるなら、一緒にミサに与ってほしいのです」と答えたのでした。

外部からの支援

最初の支援は、3月26日でした。電話がつながってすぐに北仙台教会の信徒の方々が、米、水、缶詰など多くの食料を携えて原町教会を訪れました。Aさんたちは、戸惑いました。屋内待避の最中に他教会からの支援が届くなんて、考えも及ばなかったからです。教会にはその時二人の信徒しかいませんでした。食べ物が手に入らなくなっていたので、とても有り難く感謝しました。その後、各地の教会やボランティアの方々が、何度となく原町教会を訪れるようになりました。

10月9日には、福島市松木町教会の信徒の方々と合同で追悼ミサが行われ、90人ほどが原町教会の小さな聖堂に入りました。そして、クリスマスを迎え、教会に宿泊するボランティアもだんだんと増えました。年末年始にも、新年のミサにも、他県からおおぜいの方が参加しました。

1年後の3月11日には追悼ミサが行われました。幸田司教はじめ82

人が集まりました。しかし、1年が過ぎても、復興はまだまだでした。

5月6日には、梅津神父に代わって、名古屋教区から狩浦正義神父が赴任しました。この日に一人の信徒が亡くなり、狩浦神父は赴任早々、嵐の中をお祈りに行ったのでした。

支援される立場から支援する立場へ

Aさんたちは、復興に向けて自分たちも何かできないだろうかと考え、CTVCのボランティアが活動している仮設住宅集会所に、教会のメンバーと行ってみることにしました。最初はおそろおそろでしたが、手作りのケーキを持参するなどして、回を重ねるごとに顔を覚えてもらえるようになりました。

Aさんたちは、無我夢中で活動してきました。被災直後の混沌から比べれば、原町教会はようやく明るい光が見えるようになりました。これは、度重なる継続的な支援と励ましの賜物です。もし教会の中で閉鎖的になって閉じこもっていたら、何の改善もされなかつただろうとAさんは振り返ります。この震災を通して交わりの輪が広がり、絆も生まれて、各地に多くの知り合いができました。何より、多くの仲間がいつも一緒にミサに参加して、ともに奉仕できることは心強いことです。「私でよければ、喜んでご奉仕します」との返事が誰からも聞こえます。「喜んで……」、これは、何と心地よい響きでしょう。原町教会に手伝いに来た外部の方々の姿勢や態度を見て、それまで朗読当番や掃除当番を遠慮していた信徒も積極的に参加するようになってきました。礼状などを書く人も現れました。何年も教会にご無沙汰だった人が、手紙を受け取り、突然訪ねて来たりもしました。このようにして、幸か不幸か、今まで閉鎖的だった教会が外に向かって開かれてきたのです。

多くの方々が、この教会に巡礼に来てくださること、そして、教会の壁が取り払われて皆で打ち解け合えることがとてもうれしい、とAさんは振り返っています。これからも、この教会を神が導いてくださることを願いながら……。

私たちの選択

誰の言葉にも左右されず私たち夫婦の決断を生きる

母の言葉に背を押されて

「あなたはもう親なんだから、あなたが守らなければいけないのちがあるでしょう。子どものいのちを守りなさい。お父さん、お母さんたちも親だから、あなたを守りたいのよ。早く行きなさい!」。3月14日、福島第一原発の3号機が爆発した時の母の言葉に後押しされ、山本香織さん（仮名 34歳）は1歳にも満たないエリちゃん（仮名）と夫の3人で放射線被曝ひばくを避けるため、国道49号線をひたすら車で走り、埼玉に向かいました。

香織さんは、夫とエリちゃん、そして88歳と85歳の祖父母、父と母、兄の8人家族です。11日には大きな揺れが何度も襲い、この世の終わりではないかという恐怖に駆られながら、まずは家を出て、車の中で過ごしました。最初はただ家族と親戚の安否を確認することしか考えられませんでした。深夜に、電ひょうが降る中家の中に入り、送電されていることを確認しテレビをつけると、その時テレビに流れたのは思いもかけない福島第一原発1号機の爆発でした。香織さんの家は第一原発から50km圏内、福島第二原発から30km圏内の距離にあります。すぐにチェルノブイリの事故が思い起こされ、子どもたちの被曝のことが脳裏を横切ったのでした。

「1号機が爆発した時から家族で話し合っていた約束は、『次に何か起こったら、家族そろって何が何でもここから出よう』ということでした。でも実際に3号機が爆発した時、祖父母が『この地を離れたくない』と言い出したのです。結局、両親も祖父母を置いて避難することができず、母の言葉に背を押されて私たち3人だけで避難を決意しました。『もしかしたらもう一生親と会えないかもしれない、もう二度と福島に帰れな

いかかもしれない』という思いにとらわれました。夫も『大丈夫だよ、放射能漏れはないから』と言う夫の両親を説き伏せることができず、結局二人ともそれぞれの両親を見捨てたかのように、泣きながら母の郷里である埼玉に向かったのです」。

ホテル生活から生じたストレス

当初香織さんは、埼玉の親戚や、以前勤めていた東京の会社の寮に身を寄せていたのですが、しばらくして福島県外避難者のための援助を受けることにしました。次の生活の場は、都内の高級ホテルでした。会社から復帰の辞令が出た夫は福島に戻り、その時から母子二人だけの生活が始まりました。

ホテルの生活は2カ月という期限付きでしたが、香織さんが最も悩んだのは、エリちゃんの食事でした。温かい離乳食を用意してほしいとも言い出せず、提供されたビン詰めの離乳食を利用していました。ところが多くの高齢な避難者にも離乳食が好まれ、なかなか手に入らない時もありました。

そしてホテルを出なければならなくなった時、次の生活の場をどこに求めるかという問題に直面したのです。「じっくりと住める住宅に入ってしまうと、いよいよ福島に帰ることが困難になるだろう。いつでも帰って来られるよう、都営住宅には入らないで欲しい」という夫の強い思いから、都内のビジネスホテルに入居しました。その最中、香織さんの父親が失業し、母親と一緒に上京。近くの施設に緊急避難したのです。

ホテルの部屋は、シングルベッド二つが並べられ、あとはテレビが置かれた机だけで、壁との隙間は狭く、すれ違うこともできません。また、あくまでもビジネスが優先で、客が多い時は他の部屋に移らなければなりません。エリちゃんはベッドの上が遊び場で、香織さんはその隙間に横になることもできず、ただ座っているだけの毎日。食事も朝、夕は併設のレストランで客と一緒に、昼はコンビニの弁当、ましてや乳幼児用のメニューはなく、知らず知らずのうちに香織さんの心の中に、大きなストレスが溜まっていったのです。

「ママ、ママ、という声を聞くたびにイライラを抑えることができず、何度この子を投げようと思ったかしれません」。もの静かな香織さんの口から、想像もできない言葉が出てきました。「大声で叱る、思わずひっぱたく、本当に悪い母親でした」と、涙ながらに話す香織さん。「そのうち、自分も飛び降りたら、楽になるかなあって考えたりして。あの頃はどうかしていたんですね。自分では気づきませんでした。母が『顔色が悪いから、一度病院で診てもらったら』と気遣ってくれて、病院に行きました」。病院では精神安定剤が処方され、今も安定剤を手放すことはできません。しかし、以前のような苦しい思いからは抜け出せています。

「夫には思い詰めたことは言えないのです。言う『じゃあ、帰って来い』と言われてしまいます。私はエリを守りたいだけなのです。そのことをいちばんに考えたいのです。『私たちの生活が大変だから、とか、もう心情的に我慢できなくなってきたから、とか、金銭的に行き詰まってしまったから、という理由で帰るのではなく、エリが福島で生活しても大丈夫という確信が持てたら帰ろう』と夫と話しました。それだけはぶれないでいたい」。

「普通の生活を送りたい」それが今の望み

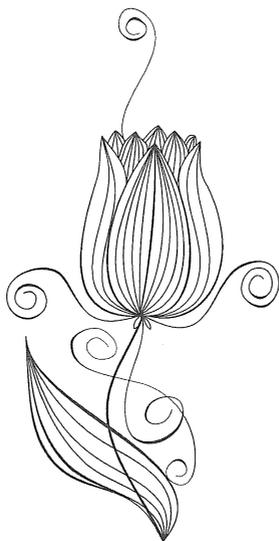
「先日議員さんと話し合う機会があり、議員さんに『何を望みますか』と聞かれました。ある男性の『放射能汚染の心配をすることなく、以前のように、野原で山菜を摘んだり、川で魚を釣ったりしたいです』という発言に『それは贅沢な希望ですね』と即答されました。今まで普通にできていたことを望むのは、今は贅沢なことなのですね……。私は家族そろって住むことが願いです。一度、夫が福島を引き上げて東京に来ることを話し合ったことがあります。でも、長年勤めた職場を離れる不安や、年老いた親のそばを離れることはできない、という理由で消えました。今は仕事の合間を縫って、夫が来てくれます。わずかな滞在でも、私たちにとっては大切な時間です。福島の親戚は、『私たちはここ(福島)に住んでいるのに、どうしてあなたたちは住めないの』と思っているでしょう。特に私たちの市は、県内避難者の方たちを受け入れています。『な

のに、なぜあなたたちはそんなに心配するの』という多くの人の思いを感じます。『危険だ』『大丈夫だ』と学者によって見解が違います。どちらが正しいのかは分かりません。もしかしたら、エリが大きくなった時、お父さんと離れ離れの生活だったことを恨むかもしれません。でも今は、夫婦の決断を生きるしかないのです」。

そんな香織さんに将来の夢を聞いてみました。

「私は美容師なので、自分のお店を開けたらいいなと思います。みんなが集まって、おしゃべりが弾むような。その隣には、夫の大好きなバイクをいじれる場所があったりして」。そう言う香織さんには笑顔が戻っていました。公園で子どもたちを遊ばせている幸せそうなママさんの笑顔です。

この香織さんの「普通の生活を送りたい」という望みは、きっと福島を離れ、夫と別々に暮らす若いママさんたちの望みであり、原発事故で、犠牲を伴う生活を強いられているすべての人の願いであるに違いありません。



それでも福島で生きたい 短大生の福島で暮らすことへの思い

福島市内にある桜の聖母短期大学の「がんばっぺ同好会」は、市内の仮設住宅で、入居者の方々に体操の機会を提供するボランティア活動をしています。その同好会の3名の学生から、福島で暮らすことへの思いや感じていることについて、話をうかがいました。

ここで明るく生きるんだ（Sさん：英語学科2年）

私は福島の出身です。短大への進学は震災と原発事故直後の春でしたので、どうしようかと考えました。が、現実的にはすでに桜の聖母に合格していたので、そこに入学することに決めました。でも別の選択肢があれば、私も県外に避難していたかもしれません。家では「放射線量の低い会津に子ども二人で疎開したら」という話も出ました。でも、入学してからは、避難して精神的に追い詰められるよりも、ここで明るく生きていったほうがいいのではないかって思ったんです。

「福島っていいな」という、ずっと住んできた福島への愛着がわいてきました。最近、他の都市に出かけて福島に帰ってくると感じるんです。以前は、他府県のほうが、福島より人もたくさんいて、ビルもあって、かっこいいと思っていたのに、今は、この自然、この土地への愛着の心が分かるようになりました。

2012年に入ってから福島産の野菜を食べるようになりました。でも、おばあちゃん心配して福島産の野菜は買ってきません。魚は太平洋産のものを避けています。お米は会津の親戚から送ってもらっています。

反原発の意見を持つ人たちが、原発を批判したいがために、今の福島は環境が悪化していると強調するのは、やめてほしいと思います。反原発の世論を盛り上げることの目的のために、今の状況が利用されるのは

嫌なんです。福島に住んでいる人は精神的に追い詰められてしまいます。

いったんこのような事故があると、今まで築いてきたコミュニティが壊れてしまうことが最も怖いこと。そう考えると、原発は無いほうがいいですね。でも電力が不足していると考えたら何とも言えないし……。

福島がこの震災でだめになるのではなくて、これからさらに良い福島にしていけたらいいと思っています。

故郷を捨てることはできない (Kさん：英語学科2年)

震災によって県外に出かける機会が多くなったけれど、高齢化が進んでいるこの福島の、お年寄りの温かみが分かるようになりました。福島の人たちの良さにも改めて気づいたんです。

震災後は水汲みでも何でも、若い人の力が必要だったんです。そして今でも仮設住宅などでは「必要とされている感」があります。今までは忙しくて不安を感じる余裕もなかったです。

母は一度県外に出たほうがいいのか、と言っていましたが、父の会社の都合で引っ越しはできないし……。最近になって、福島で生きるんだって、思うようになりました。

食品の安全性の基準値が変わっていくことについて不安感がありました。最近、ボランティアとして農家さんを訪問して、安全なものもあることを知りました。今、放射性セシウム不検出の農作物の安全性をPRしているんです。福島の野菜は美味しいですから。自分たちから食べていこうよ、元気になっていこう、という気持ちです。でもメディアに載る福島の農作物についてはマイナスのことばかりなので……。

県外の人たちから「福島の人は放射能について無関心すぎる」と言われるんです。「県外に出たほうがいいよ」とばかり言われます。「危ないよ」って。せっかくここでがんばっていくと決意したのに！

福島でがんばっている若者はたくさんいます。私も福島でがんばって、貢献したいんです。自分の故郷を簡単に捨てることはできない。就職も農業の復興に関わりたいです。福島イコール米、果物なので、そこから始まれば福島が元気になっていくと思います。そして福島に戻りたいと

思う人が一人でも増えてくれたら、と願っています。

私は脱原発でもなければ推進でもありません。原発は無いにこしたことはないんですけど。でもこれは福島だけの問題ではなく、世界に共通するエネルギーの問題。このことをきっかけにエネルギー問題をしっかりと考えていければと思います。

福島に一度来てください。福島からの学びがあります。私たちがこんな風に元気で生きているということを知ってもらいたいです。偏見をもたずに、いつでも来てください。そして一緒に活動をしたいです。

笑顔でやっていますよ (Iさん：ライフデザインコース2年)

福島の短大に入学することについて、確かに親は心配していました。「他の選択肢もあるよ」と言ってくれました。ただ私には、福島にいて、福島をよく見てから大学に編入したいという思いがあります。そのほうが学びが深まると思うのです。

お米は毎日のことですから、福島産の古米を食べています。新米は新潟から送ってもらっています。野菜は祖父母が作ってくれていますが、いままで食べていたものを食べないわけにはいかないんです。一生懸命作ってくれたものですから。会津のものは安全なのですが、福島全域のものが売れなくなっています。農家さんががんばっている人がたくさんいるのに……。

最近まで、東京の叔母からは、私と弟だけでも避難してきたほうがいいと勧められていました。避難するかどうかをめぐって、福島の中に「残るのは美談、外に出るのは悪」と見られる時期がありました。避難した人は「あの人が逃げた」と思われる。そうすると戻って来にくくなりますよね。本当は「どっちもあり」なんだと思うんです。選択肢はいろいろあっていいはず。まず福島の間人がそう思わなくては。同じ立場にある者同士が分かり合おうよって思います。

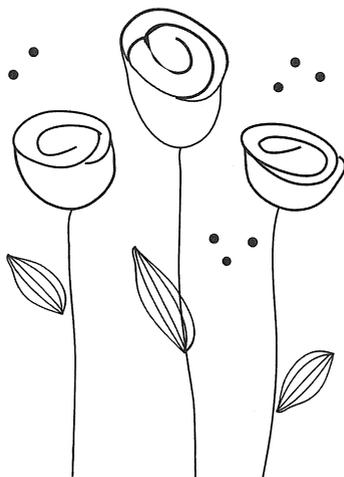
将来、大学に編入して「地域活性化」の研究をしたいので、一度福島を出て、福島を外から見たいと思っています。その時が来るまでは、できるだけ福島の現状を見ていたいという思いがあります。自分の意見と

して福島を語れるようにしたいからです。

確かに、震災と原発事故を通して、ますます福島のことを考えるようになりました。去年はとても悲観的になっていました。「何で福島なの……」っていう被害者意識が強くなって。でも、福島を愛するようになってくれたのも震災でした。震災までは都会に行きたい願望ばかりでしたが、この歳になってやっと、「福島って、故郷って、いいな」と思えるようになりました。私の中では「ありがとう」の気持ちがあるんです。

原発があるからこそ生計を立てられている人がいます。その人たちの前で反原発とは言えないです。でも心の中では、原発はやっぱり無いほうがいいと思います。原発以外の働き口が見つけられればいいんですけど。原発があることで雇用が生まれ、安定した収入が保障されていたのですね。一回甘い蜜を吸ってしまうと難しいかもしれません。

震災と事故の後、悲しむだけ悲しんだので、今は元気にやっています。「笑顔でやってますよ」ということを伝えたいです。



野菜販売で復興支援

風評被害を受けた農家に元気を取りもどすために

福島の野菜が売れません

「風評被害にあっている農家の方々をすぐにでも助けたい」という強い思いが、柳沼千賀子さんを福島の野菜販売の最前線に駆り立てたのでしょうか。そのバイタリティは、お婆からは想像もつきませんが、まん丸メガネにぼっちゃり笑顔の柳沼さんは、福島訛りのイントネーションが随所に現れ、とても身近に感じる人柄です。

今回の震災で福島県は、地震と津波、そして原発事故という三つの被害を同時に被りました。福島は農業県です。人は被曝を避けて逃げることができますが、土地は動かさません。土地に生きる農家の方々は土地を捨てて逃げるわけにはいきません。もちろん避難を強いられて耕作を放棄された方もいますが、放射性物質で汚染されたからといって、先祖からの土地を捨てるわけにはいかないのです。とどまって何とかしようと非常に努力されています。

幸いなことに放射線量を測定してみると、土壌が汚染されていても作物までには影響しないことが分かってきました。ところが、それが風評被害というもので、買っていただけません。日本では初めての事故でもあり、正確な情報が迅速に伝えられなかったこともあって、福島県で採れた安全な野菜までもが販売できなくなりました。

「福島やさい畑～復興プロジェクト～」

福島県で育った人が、そこで生活を営むことは当然の権利であるのに、福島県の大地の恵みを受けて育った、放射能に汚染されていない野菜を、農家が販売できないことは、辛く悲しいことです。柳沼さんは、検査で安全確認された産品まで敬遠されて、売れないものを捨てるほか手だて

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

この冊子の編集にあたり、差別語、不快用語については、厳正な検討を加えて注意を払いましたが（面談者が話し言葉で使っている用語、用法はそのまま使用している場合もあります）、お気付きの点がございましたら、ご指摘、ご教示いただければ幸いです。

この小冊子は点訳・録音テープの作成をロゴス点字図書館にお願いしています。2010年1月1日より著作権法が改正され、これまで視覚障がい者のみに貸し出されていた点字図書館の録音図書（テープ・CD）が高齢、病気などの理由で活字の本を読むことが困難な人にも貸し出されることになりました。ご希望の方はロゴス点字図書館（電話：03-5632-4428）までお問い合わせ下さい。

●ご意見・ご感想を以下までお寄せ下さい●

四旬節キャンペーン小冊子 No.27 2013年

「つなぐ 2013」

2013年2月13日 発行 ©カトリック中央協議会2013年

編集 カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10

日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411

カリタスジャパン 電話 03-5632-4439（直通）

FAX 03-5632-4464

E-mail info@caritas.jp

URL <http://www.caritas.jp/>

印刷 精興社

Printed in Japan



カトリック教会 **カリタス ジャパン**®

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館

TEL: 03-5632-4439 E-mail: info@caritas.jp

FAX: 03-5632-4464 URL: www.caritas.jp